



聖心女子大学
「聖心歳時記」

@SeishinDiary



聖心女子大学「聖心歳時記」

作成者 goukaku@u-sacred-heart.ac.jp [?]

このページに「いいね!」する 8月15日

シリーズ学生記者が行く

ー広尾Walking2017ー



今から遡ること半世紀、広尾の街には路面電車である東京都電車(通称、都電)が走っていました。都電は1882年(明治15年)6月に新橋から日本橋間で馬を使った鉄道馬車が始まりといわれ、1903年(明治36年)8月に動力が馬から電気へと切り替わり、その3年後の3月に信濃町から天現寺橋までの区間が開通。その後は都内一円に都電の路線網が広がりました。天現寺橋交差点の角(現在の都営広尾5丁目アパートと広尾公園になっている場所)には大正3年に広尾電車営業所車庫が開設され、7・8・33・34系統の運行を担当していました。その中でも現在の東京メトロ広尾駅前の外苑西通りを走り、四谷3丁目～品川駅を結んでいた7系統、また明治通りを通り中目黒～築地で運行していた8系統、また渋谷駅～金杉橋を繋ぐ34系統が天現寺橋停留所にも停まり広尾住民の足となっていました。



昭和30年当時の乗車運賃はなんと片道一律10円。その当時の物価で見ると、鉛筆1本やあんパン1個と同じなのだとか。ちなみに現在、唯一運行されている都電である荒川線の運賃は片道170円です。

高度成長期となり、昭和39年に開催された東京オリンピック後はモータリゼーションが進み、車と同じ道を走る路面電車は交通渋滞の原因とみなされ、利用者に惜しまれながらも都電は徐々に姿を消していきました。広尾電車営業所車庫も昭和44年にはその役割を終えています。

「当時の都電は唯一の交通手段で、どこへ行くにも欠かせない存在でしたよ。終戦後しばらくは街の同級生で都電を住まいにしている人も多かったんだ」と語るのは、幼い頃から都電を利用して来た広尾商店街 専務理事の秋山さんです。戦後、住む場所が不足していた状況が想像できますね。

また、同じく商店街にお住いで、高校時代は写真部に所属されていた田井さんには7系統と34系統の都電が実際に走っている写真を見せていただきました。沢山の貴重なお写真と共に、実際の運転に使われていた電車のブレーキと前進と後進を切り替えるスイッチを今でも大切にお持ちです。

昭和44年と書かれている写真(提供: 新村理事長)は広尾商店街広報誌「HIROOwalk第8号」に掲載された広尾電車営業所車庫の様子。ずらっと並ぶ電車の遥か後ろに映っている白い建物は聖心女子大学の校舎です。



昭和44年といえば、アメリカではアポロ11号を打ち上げ、初めて人類が月面に立った年。

普段何気なく通り過ぎてしまう広尾の街並みも、走っていた路面電車や当時の出来事を想像しながら歩いてみると、これまで気づかなかった発見があるかもしれません。

SRS(聖心 Radio Station)部員 葛西 陽(1年)

